

博士論文（要約）

論文題目 榎茂都陸平の「新舞踊」の研究
－鷺谷家所蔵舞踊譜の解説による再検討－

氏名 桑原 和美

榎茂都陸平の「新舞踊」の研究

－鷺谷家所蔵舞踊譜の解読による再検討－

<目次>

序章	1
I 問題提起	1
II 変化する「新舞踊」の概念	2
1 「新舞踊」という言葉の登場	
2 昭和初期における「新舞踊」の概念	
3 戦後期から現代における「新舞踊」の解釈	
4 戦中期の舞踊統制と戦後の「新舞踊」	
5 大正期・昭和初期の「新舞踊」	
III 榎茂都陸平について	8
IV 論文の構成	10
鷺谷家所蔵「榎茂都資料」	13
資料	
凡例	
第1部 榎茂都陸平の「新舞踊」の背景	17
第1章 榎茂都流の伝承と革新性	17
第1節 受け継がれる改革の精神	
第2節 榎茂都流舞技心得の伝承：初代扇性筆「風流舞 行儀の手引艸」	18
第3節 榎茂都流型附（舞踊譜）	20
第1項 初代扇性筆『手技芦技之銘目』	
第2項 現存する榎茂都流型附	
第3項 二世扇性による舞踊記譜法の特徴と伝承	
第4節 二世扇性による「浪花踊」の演出と先進性	27
第1項 二世扇性の功績	
第2項 新町「浪花踊」の振付	
第5節 坪内逍遙と榎茂都流	31
第1項 坪内逍遙の舞踊改革論	

第2項	新舞踊劇《和歌の浦》における扇性と陸平の協同振付	
第2章	明治期から昭和初期における西洋舞踊受容	45
第1節	欧化政策と舞踊（ダンス）	45
第1項	鹿鳴館のダンス	
第2項	学校教育におけるダンスの導入	
第3項	西洋音楽受容と舞踊	
第2節	往来する人々が伝えた西洋の新しい舞踊像	49
第1項	坪内士行が見た新しい舞踊（1909-1915）	
第2項	山田耕筈が見たニジンスキー、ダンカン、ダルクローズ（1910-1913）	
第3項	齋藤佳三が「歐州で見た踊りの印象」（1912-1914）	
第4項	小山内薫：バレエ・リュスからダルクローズへ（1912-1913）	
第5項	二代目市川猿之助が見たロシアン・バレエ（1919）	
第6項	林久男の舞踊巡礼（1922-1924）	
第7項	村山知義：ニディー・インペコーフェンへの没入（1922）	
第8項	石井漠によるマリー・ヴィグマンの評価（1922-1925）	
第9項	大正・昭和初期の来日舞踊家	
第3節	大正期の雑誌に見る新しい舞踊	63
第2部	榎茂都陸平による「新舞踊」の活動	76
第3章	初期宝塚少女歌劇における榎茂都の新舞踊（1917-1921）	76
第1節	上演作品	76
第2節	新舞踊に関する榎茂都の言説	79
第4章	松竹楽劇部における榎茂都の新舞踊（1921-1924）	83
第1節	松竹楽劇部の創設	83
第2節	松竹楽劇部における振付・上演作品	85
第3節	松竹楽劇部時代の新舞踊観	91
第5章	榎茂都舞踊協会と第二期宝塚少女歌劇の時代（1924-1931）	97
第1節	榎茂都舞踊協会（1924-1927）	97
第1項	設立の主旨	
第2項	組織	
第3項	舞踊手の養成	
第4項	上演活動	

第5項	上演作品	
第6項	機関誌『舞踊』	
第2節	第二期宝塚少女歌劇団時代（1924-1931）の活動	109
第1項	舞踊作品	
第3節	新舞踊観	114
第1項	1924-1927	
第2項	1928-1931.2	
第6章	欧米舞踊視察（1931.2-1934.3）	127
第1節	視察の背景と目的	128
第2節	ヨーロッパで観た舞踊	131
第1項	ウィーンの舞踊	
第2項	ベルリンの舞踊	
第3項	パリのレビューと国際振付コンクール	
第3節	日本の舞踊を紹介する	147
第1項	日本舞踊のレクチャー・デモンストレーション	
第2項	ウィーンにおけるリサイタル	
第4節	サイン帳（Autograph album）に見る舞踊家との交流	154
第3部	榎茂都陸平の「新舞踊」作品	167
第7章	大正期の新舞踊《春から秋へ》	167
第1節	《春から秋へ》の構想	168
第2節	《春から秋へ》の舞踊譜	171
(1)	舞踊譜の概要	
(2)	記譜の基本形式	
(3)	舞踊譜の解読と舞踊の再現	
(4)	《春から秋へ》の構成と各部の概要	
第3節	舞踊譜に見る《春から秋へ》の特徴	177
第1項	蝶の表現	
第2項	舞踊技法：日本舞踊・西洋舞踊（バレエ）・舞楽	
第3項	音楽と舞踊	
第4項	群舞	
第5項	衣裳・装置・照明	
第4節	市川猿之助の《新舞踊蟲》	200
第1項	動機：「ロシアンバレエが、《新舞踊蟲》を生んだ」	

第2項	構成及び各段の概要	
第3項	《蟲》の音楽	
第4項	舞踊動作・群舞	
第5項	《春から秋へ》と《蟲》	
第8章	昭和初期の新舞踊《ソナタ・アパシヨナータ》	213
第1節	《ソナタ・アパシヨナータ》の上演	213
第1項	宝塚少女歌劇『歌劇』愛読者大会	
第2項	ウィーンにおけるリサイタル	
第2節	《ソナタ・アパシヨナータ》の舞踊譜	215
第1項	舞踊譜の形態	
第2項	記譜方法	
第3項	舞踊譜の翻刻・解釈と再現演舞の手順	
第3節	舞踊譜に見る《ソナタ・アパシヨナータ》の振付	220
第1項	作品の主題	
第2項	特徴的な舞踊動作	
1.	第1楽章	
2.	第2楽章	
第3項	舞踊と音楽	
1.	第1楽章	
2.	第2楽章	
第4項	群舞：人数構成と隊形変化	
1.	第1楽章	
2.	第2楽章	
第5項	衣裳	
第9章	大規模化する新舞踊	248
第1節	昭和戦前期の舞踊界と煤茂都の新舞踊観	248
第2節	帰国後の活動と作品	250
第3節	大規模な群舞作品	253
第1項	《裸山の一夜》の振付	
第2項	《出埃及記》	
第3項	《タンホイザーの幻想》	
第4項	《蟻》	
第5項	《總力》	

結び	272
注	279
表 I 榎茂都陸平略年譜	317
表 II 榎茂都陸平による執筆・対談等記事一覧	326
表 III 現存する榎茂都陸平の舞踊譜（宝塚上演作品）	332
図表 1-2 「手技足技之銘目」翻刻	334
図表 8-2A 《ソナタ・アパシヨナータ》第 1 楽章：静止画像	350
図表 8-2B 《ソナタ・アパシヨナータ》第 2 楽章：静止画像	356
参考文献一覧	359

別資料

- 資料 I 《春から秋へ》舞踊譜翻刻・解説
- 資料 II A 《ソナタ・アパシヨナータ（熱情奏鳴曲）》舞踊譜翻刻・解説（第 1 楽章）
- B 《ソナタ・アパシヨナータ（熱情奏鳴曲）》舞踊譜翻刻・解説（第 2 楽章）
- 資料 III 《裸山の一夜》舞踊譜翻刻
- 資料 IV 《ソナタ・アパシヨナータ》再現演舞映像 DVD
- 資料 V 参考資料：《春から秋へ》再現演舞映像 DVD

本論文は単行本として5年以内に刊行する予定です。

参考文献文献一覧

凡例

・参考文献を次の8つの項目に分類して示す。

I 書籍(日本語)、II 書籍(外国語)、III 雑誌・新聞記事、IV 辞典・事典、

V カタログ、VI 年史・資料集、VII 映像資料、VIII 『宝塚少女歌劇脚本集』(1917～1942)

・配列は、50音順とする。共著の場合は筆頭者名による。また、同一著者による場合は、発行年月順とする。

・同一著者による場合は、2件目以降を省略し、―――で示す。

・発行年は西暦で示す。

I 書籍(日本語)

赤井正二『旅行のモダニズム―大正昭和前期の社会文化変動―』ナカニシヤ出版、2016年。

赤間雅彦『童謡遊戯と体育ダンス』ささや出版、1925年。

―――『基本体育舞踊の理論と実際』厚生閣、1933年。

―――『唱歌遊戯と行進遊戯』日本体育学会、1927年。

蘆原英了『僕の二人のおじさん、藤田嗣治と小山内薫』三秀舎、2007年。

飛鳥井雅道『鹿鳴館(岩波ブックレット・シリーズ日本近代史2)』岩波書店、1992年。

石井歡『舞踊詩人 石井漠』未来社、1994年。

―――『舞踊の本質と其創作法』人文会出版部、1927年。

―――『舞踊芸術』玉川学園出版部、1933年。

―――『私の顔』モダン日本社、1940年。

―――『世界舞踊芸術史』玉川学園出版部、1943年。

―――『舞踊さんまい』右文社、1946年。

―――『私の舞踊生活』講談社、1951年。

磯田光一『鹿鳴館の系譜』文芸春秋、(第3版)1995年。

市川猿之助『猿之助随筆』日本書荘、1936年。

市川雅『ダンスの20世紀』新書館、1995年。

伊藤延男『標準日本舞踊譜』東京国立文化財研究所、(再販)1989年。

井上理恵『川上音二郎と貞奴―明治の演劇はじまる―』社会評論社、2015年。

―――『川上音二郎と貞奴II―世界を巡演する―』社会評論社、2015年。

今竹七郎の記録編集委員会『今竹七郎とその時代』誠文社、2003年。

今宮互喜会『ももそびと』今宮互喜会、1938年。

今村嘉雄『日本体育史』金子書房、(第3版)1955年。

岩橋小彌太『日本舞踏史』国史講習会、1922年。

岩淵達治『水晶の夜、タカラヅカ』青土社、2004年。

- 榎茂都陸平『子供の為めの舞踊』第一輯、榎茂都舞踊協会、1927年。
 —— 『子供の為めの舞踊』第二輯、榎茂都舞踊協会、1927年。
 —— 『舞踊への招待』全音楽譜出版社、1958年。
- 海野弘『モダン・シティふたたびー1920年代の大阪へ』創元社、1987年。
- 遠藤寛子『『少女の友』とその時代』本の泉社、2004年。
- 大阪市立住まいのミュージアム(編)『モダン都市大阪ー近代の中之島・船場』大阪市立住まいのミュージアム、2002年。
- 大田黒元雄『露西亞舞踊』東京堂書店、1917年。
 —— 『露西亞舞踊』第一書房、1926年。
 —— 『歌劇大観』アポロ出版社、(第2版)1948年。
 —— 『バレエ大観』苦楽社、1949年。
- 大谷武一『独逸其他に於ける新体操(師範大学講座体育第一卷)』建文館、1935年。
 —— 『新教育体操』目黒書店、1937年。
 —— 『新しい体操への道』目黒書店、1930年。
- 大中博『珠實舞踊七十年』舞踊界社、1976年。
- 岡田万里子『日本舞踊曲集成②京舞・上方舞編』演劇出版社、2005年。
 —— 『京舞井上流の誕生』思文閣出版、2013年。
- 奥中康人『国家と音楽 伊澤修二が目指した日本近代』春秋社、2008年。
 —— 『和洋折衷音楽史』春秋社、2014年。
- 小山内薫『舞台芸術』早川書房、1948年。
- 小瀬峰洋『学校舞踊三十四講』厚生閣、1925年。
- 小野高裕・西村美香・明尾圭造『モダニズム出版社の光芒 プラトン社の一九二〇年代』淡交社、2000年。
- 五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』スカイドア、1998年。
 —— 『日本のアヴァンギャルド芸術 〈マヴォ〉とその時代』青土社、2001年。
- 五十殿利治・河田明久(編著)『クラシックモダンー1930年代日本の芸術』せりか書房、2004年。
- オルフ、ケネス・J.『紀元二千六百年 消費と観光のナショナリズム』木村剛久(翻訳)、朝日新聞出版、2010年。
- 柿沼太郎『ストラヴィンスキーの音楽と舞踊作品研究』新興音楽出版社、1942年。
- 柿澤充『学校舞踊・体育ダンス 教材と指導解説』岩本書店、1935年。
- 片岡康子(編著)『20世紀舞踊の作家と作品世界』遊戯社、1999年。
- 印牧季雄『スクール ダンス』櫻木書房、1924年。
 —— 『落葉の踊り』京文社、1928年。
 —— 『学校舞踊 理論より創作へ』櫻木書房、1933年。
 —— 『文部省新訂小学唱歌 尋四の舞踊』大正書院、1935年。

- 印牧季雄・井上徳雄『学校遊戯 振付の理論と実際』大正書院、1931年。
- 印牧バロー研究会『学校舞踊講座』第一巻、京文社、1934年。
- 神沢和夫（翻訳）『身体運動の習得』白水社、1985年。
- 『20世紀の舞踊』未来社、1990年。
- 亀山郁夫『ロシア・アヴァンギャルド』岩波書店、1996年。
- 川崎賢子『宝塚』講談社、1999年。
- 川路明『バレエ入門』土屋書店、1982年。
- 上林澄雄『二十世紀の舞踊史』ダンスワーク舎、1992年。
- 吉川英史『この人なり 宮城道雄傳』新潮社、1962年。
- 『日本音楽の歴史』創元社、（第15版）1982年。
- 木村駒子『舞踊芸術教程』建設社、1937年。
- 邦正美『舞踊概説』京都学校舞踊研究会、1948年。
- 『ヨーロッパの午後』極東出版社、1949年。
- 『舞踊』体育の科学社、1954年。
- 久保田金僊『日本のをどり』審美書院、1937年。
- グラツァー、ディーター&グラツァー、ルート『ベルリン・嵐の日々』、安藤実・斎藤英子（翻訳）、有斐閣、1986年。
- 桑野隆『夢みる権利—ロシア・アヴァンギャルド再考』東京大学出版会、1996年。
- 小寺融吉『をどり通』四六書院、1930年。
- 『日本近世舞踊史』雄山閣、1931年。
- 『日本の舞踊』創元社、1941年。
- 『舞踊の歩み』三國書房、1943年。
- 『舞踊の美学的研究』大河内書店、1948年。
- 『近代舞踊史論』国書刊行会、1974年。
- 後藤暢子・團伊久間・遠山一行『山田耕筰著作全集1』1巻～3巻、岩波書店、2001年。
- 小林一三『私の人生観』要書房、1952年。
- 『寶塚漫筆』実業之日本社、1955年。
- 『小林一三全集』ダイヤモンド社、1962年。
- 古俣裕介『<前衛詩の時代>—日本の1920年代—』創成社、1992年。
- 齋藤桂『<裏>日本音楽史—異形の近代』春秋社、2015年。
- 『1933年を聴く—戦前日本の音風景』NTT出版、2017年。
- 酒井府『ドイツ表現主義と日本—大正期の動向を中心に』早稲田大学出版部、2003年。
- 坂上康博・高岡裕之『幻の東京オリンピックとその時代 戦時期のスポーツ・都市・身体』青弓社、2009年。
- 櫻井良樹『国際化時代「大正日本」』吉川弘文館、2017年。
- 佐々木浩雄『体操の日本近代 戦時期の集団体操と〈身体の国民化〉』青弓社、2016年。

里見淳（編）『初代花柳壽美』曙舞踊劇団、1953年。

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成他（監修）、『世界紀行文学全集』第7巻、ほるぷ出版、1979年。

執行正俊『華麗なる輪舞』テス・カルチャーセンター、1981年。

澁井二夫『最近思潮 体育とリズムの根本研究』人文書房、1932年。

——『学校舞踊創作の心境と実際』日本体育学会、1932

——『体育ダンス教本 第十二輯』新生閣書店、1940年。

澁井二夫・寺谷朝蔵『要目活用 体育ダンスの指導』目黒書店、1933年。

菅井幸雄『築地小劇場』未来社、1974年。

砂本靖二『体育ダンス』廣文堂書店、1924年。

鈴木聖子『＜雅楽＞の誕生 田辺尚雄が見た大東亜の響き』春秋社、2019年。

大正演劇研究会（編）『大正の演劇と都市』武蔵野書房、1991年。

大日本文明協会（編）『舞踊と歌劇』大日本文明協会、1913年。

タウト、ブルーノ『ニッポン』講談社、（第11版）1997年。

ダウンナー、レズリー『マダム貞奴ー世界に舞った芸者』木村英明（翻訳）、綜合社、2007年。

高崎みどり『大正期『中央公論』『婦人公論』の外来語研究ー論と広告にみるグローバリゼーション』富山房インターナショナル、2019年。

高階秀爾『日本絵画の近代』青土社、1996年。

高木貞二『律動運動の研究』心理学研究会、1921年。

高橋堯『高学年の表現舞踊』文化書房、1931年。

武石みどり（監修）『音楽教育の礎 鈴木米次郎と東洋音楽学校』春秋社、2007年。

竹村民郎『大正文化 帝国のユートピア』三元社、2004年。

田中良『舞台美術』西川書店、1944年。

玉岡かおる『タカラジェンヌの太平洋戦争』新潮社、2004年。

千葉潤之助・千葉優子『音に生きる 宮城道雄伝』講談社、1992年。

津金澤聰廣『宝塚戦略ー小林一三の生活文化論』講談社、1991年。

津金澤聰廣・近藤久美（編著）『近代日本の音楽文化と宝塚』世界思想社、2006年。

坪内士行『舞踊及歌劇大観』東京堂書店、1925年。

——『越しかた九十年』青蛙房、1977年。

——『坪内逍遙研究』今泉誠文社、（第2版）1987年。

テイス、フランク『舞踊理論』永田龍雄（訳）、田老鶴圃、1924年。

テリイ、エレン『露西亞舞踊』永田龍雄（訳）、聚芳閣、1925年。

富田仁『鹿鳴館ー擬西洋化の世界』白水社、（第5版）1995年。

内藤高『明治の音』中央公論新社、2005年。

永井良和『社交ダンスと日本人』晶文社、1991年。

——『日本ダンス物語ー「交際術」の輸入者たち』リプロポート、1994年。

長澤均・コレ、パピエ『倒錯の都市ベルリン』大陸書房、1986年。
永田龍雄『泰西舞踊図説』矢吹高尚堂、1922年。
中野正昭（編著）『ステージ・ショウの時代』森話社、2015年。
中埜芳之・楠根重和・ヴィーガント、アンケ『ドイツ人の日本像 ドイツの新聞に現われた日本の姿』三修社、1987年。
長原政二郎『舞踏大観』十字屋、1905年。
中村洪介『西洋の音、日本の耳ー近代日本文学と西洋音楽』春秋社、1987年。
――『近代日本洋楽史序説』東京書籍、2003年。
中村秋一『レビューと舞踊』三笠書房、1933年。
――『舞踊と文化』人文閣、1941年。
――『ドイツ舞踊文化』人文閣、1941年。
西形節子『近代日本舞踊史』演劇出版社、2006年。
西崎緑『舞踊のあけくれ』要書房、1953年。
西宮安一郎（編）『藤蔭静樹 藤蔭会五十年史』カワイ楽譜、1965年。
西宮安一郎（編）『江口隆哉と芸術年代史』東京新聞出版局、1989年。
二宮文右衛門・今村嘉雄・大石峰雄『体育の本質と表現体操』目黒書店、1933年。
日本教育学会（編）『創作 学校新舞踊』日本教育学会、1935年。
日本教育舞踊協会『図解詳説 小学校新舞踊』東苑書房、1935年。
ヴァイセンベルガー, R（編）『ウィーン・芸術と社会 1890-1920』岩波書店、1995年。
芳賀直子『バレエ・リュス その魅力のすべて』国書刊行会、2009年。
朴祥美『帝国と戦後の文化政策ー舞台の上の日本像』岩波書店、2017年。
林久男『舞踊国巡礼』岩波書店、1925年。
原克『美女と機械 健康と美の大衆文化史』河出書房新社、2010年。
原比露志『寝室の美学』春陽堂、1930年。
パンツァー, ペーター&クレイサ, ユリア『ウィーンの世界』佐久間穆訳、サイマル出版会、1990年。
『パンテオン会』雑誌研究会編『パリー一九〇〇・日本人留学生の交遊』ブリュッケ、2004年。
兵藤裕己『演じられた近代 <国民>の身体とパフォーマンス』岩波書店、2005年。
――『<声>の国民国家 浪花節が創る日本近代』講談社、2009年。
平井正『ベルリン 1918-1922 悲劇と幻影の時代』せりか書房、(第2版) 1981年。
――『ベルリン 1923-1927 虚栄と倦怠の時代』せりか書房、(第2版) 1983年。
藤田洋『日本舞踊ハンドブック』三省堂、(第3版) 2007年。
藤森成吉『ヨーロッパ印象記』大畑書店、1934年。
ボーデ, ルドルフ『リズム体操』江口隆哉(校閲)万沢遼(訳)、ベースボール・マガジン社、1962年。
升元一人『新作 舞踊教育(下巻)』日本教育学会、1932年。

- 『系統的教育舞踊指導書(上巻)』 北海出版社、1934年。
- 『系統的教育舞踊指導書(中巻)』 北海出版社、1934年。
- 『系統的教育舞踊指導書(下巻)』 北海出版社、1934年。
- 『新理論に立脚せる尋一教育舞踊指導全書』 南光社、1936年。
- 『学校舞踊の基本訓練』 啓文社、1939年。
- 町田孝子『舞踊の歩み百年』 櫻楓社、1968年。
- 三浦ヒロ『欧州の体育を見て』 蘆田書店、1926年。
- 『行進遊戯』 一成社、1930年。
- 『女性体育とダンス』 東洋図書株式合資会社、1936年。
- 『真実の体育を求めて』 同志同行社、1938年。
- 三橋義雄『世界的新研究に基づく 今日以降の日本の体操』 伊藤書房、1929年。
- 三林亮太郎『レヴユウからシヨウへ』 岡倉書房、1938年。
- 南谷美保『四天王寺聖霊会の舞楽』 東方出版、2008年。
- 嶺隆『帝国劇場開幕』 中央公論社、1996年。
- 宮城道雄『心の調べ』 河出書房新社、2006年。
- 妙法院史研究会『妙法院資料・第四巻「堯恭法親王日記・真仁法親王日記」』 吉川弘文館、1979年。
- 村松道弥『おんぶんまんだら』 現代芸術社、1979年。
- 『私の舞踊史 上巻』 スタッフ・テス出版、1985年。
- 村山茂代『明治期ダンスの史的研究—大正2年学校体操教授要目成立に至るダンスの導入と展開—』 不味堂出版、2000年。
- 村山知義『演劇的自叙伝 第2部』 東邦出版社、1971年。
- 茂木秀夫『小森敏とパリの日本人—近代日本舞踊の国際交流—』 創栄出版、2011年。
- 森悌次郎『欧州に於ける体操の新傾向』 一成社、1934年。
- 山口鐵五郎『日本舞踊大鑑』 東京文化タイムス社、1950年。
- 山田耕筈『近代舞踊の烽火』 アルス、1922年。
- 『はるかなり青春のしらべ』 長嶋書房、1957年。
- 『自伝 若き日の狂詩曲』 中央公論社、1996年。
- 山名淳『夢幻のドイツ田園都市—教育共同体ヘレラウの挑戦—』 ミネルヴァ書房、2006年。
- 山本武利(編)『占領期文化をひらく—雑誌の諸相—』 早稲田大学出版部、2006年。
- 吉田謙吉『築地小劇場の時代—その苦悩と抵抗と—』 八重岳書店、1971年。
- ラバン, ルドルフ『ルドルフ・ラバン—新しい舞踊が生まれるまで』 日下四郎(訳)、大修館書店、2007年。
- ローターズ, エーバーハルト『ベルリン・芸術と社会 1910—1933』 多木浩二・梅本洋一・持田季未子(翻訳)、岩波書店、1995年。
- 鷺谷清一『大正=歴史の踊り場とは何か』 講談社、2018年。

鷺谷七菜子・塩野てるみ『榎の世の人々』吉備人出版、2010年。

渡辺裕『宝塚歌劇と日本近代』新書館、1999年。

——『日本文化 モダン・ラブソディ』春秋社、2002年。

——『歌う国民』中央公論新社、2010年。

II 書籍 (外国語)

Bode, Rudolf. *Ausdrucksgymnastik*. München : E.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1926.

Bergson, Isa Partsch. *Modern Dance in Germany and the United States; Crosscurrents and Influences*, London : Routledge, 2013.

Dunlop, Valerie Preston & Lahusen, Susanne (ed.), *Schrifttanz*, London : Dance books , 1990.

Franko, Mark. *The Work of Dance: Labor, Movement, and Identity in the 1930s*, Connecticut : Wesleyan University Press, 2002.

Hodson, Millicent. *Nijinsky's crime against grace : reconstruction score of the original choreography for Le sacre du printemps*, New York : Pendragon Press, 1996.

Lidbury, Clare. *Kurt Jooss : Big City*, London : Dance Books, 2000.

Guest, Anna Hutchinson (ed), *The Green Table : A Dance of Death in Eight Scenes*, New York : Routledge, 2003.

Laban, Rudolf. *A Life for Dance*, Ullmann, Lisa. Trans., Landon: Macdonald & Evans Ltd., , 1975.

Mactavish, S. D. *An Ecstasy of Purpose: The Life and Art of Gertrud Bodenwieser*, Dunedin : S.O.S Print Pty, 1987.

Markard Anna & Helann, *Jooss*, Cologne: Abe Books, 1985.

Purvis, Alston & Rand, Peter & Winnestein, Anna (ed). *The Ballets Russes and the Art of Design*, New York: The Monacelli Press , 2009.

Shelton, Suzanne. *Ruth St. Denis: A Biography of the Divine Dancer*, Austin: University of Texas Oress, 1990.

Sorell, Walter. *The Mary Wigman Book: Her Writings by Mary Wigman*, Connecticut: Wesleyan University Press, 1973.

Stodelle, Ernestine. *The Dance Technique of Doris Humphrey and its creative potential*, Landon: Dance Book, 1979.

The Royal Pavilion, Art Gallery & Museums, Brighton, *Les Ballets 1933*, Weston-super-Mare: Lawence-Allen Ltd., 1987.

Umemoto Rikuhei. *Introduction to the Classical Dance of Japan*. Ishizawa, Yutaka Trans. Tokyo: Sanseido Company Ltd., 1935.

Wigman, Mary. *The Language of Dance*. Sorell, Walter Trans. Connecticut: Wesleyan University Press, 1966.

III 雑誌・新聞記事

芥川龍之介「西亜舞踊の印象」『新演芸』1922年10月、58-60頁。

麻上俊夫「ノイエ・タンツについて」『音楽倶楽部』2巻3号、1935年3月、26-30頁。

——「西洋舞踊界の新進を語る」『舞踊芸術』2巻6号、1936年8月、36-38頁。

——「西洋舞踊読本(4) リズム」『舞踊芸術』3巻5号、1937年6月、12-13頁。

麻田満洲野「今年の舞踊界から」『舞踊芸術』8巻12号、1942年12月、37-39頁。

浅海行夫「春秋座『アジアの嵐』」『新興芸術研究』2号、1931年6月、pp

蘆田止水「踏影会の感想」『舞台評論』25号、1923年5月、17頁。

蘆原英了「欧州舞踊界俯瞰—私の見た舞踊—」『音楽世界』6巻4号、1934年4月、10-22頁。

——「サカロフ夫妻の上演演目解説」『会館芸術』3巻10号、1934年10月、11-13頁。

——「近頃の感想」『舞踊新潮』創刊号、1935年5月、13-16頁。

——「シヤム舞踊覚書」『舞踊新潮』創刊号、1935年5月、17-18頁。

——「近頃の感想」『舞踊新潮』1巻2号、1935年6月、24-26頁。

——「シヤム舞踊の印象」『舞踊新潮』1巻2号、1935年6月、37-38頁。

——「珠実氏への手紙」『舞踊新潮』1巻2号、1935年6月、38-40頁。

——「近頃の感想」『舞踊新潮』1巻3号、1935年7月、24-29頁。

——「見たものから」『舞踊新潮』1巻5号、1935年9月、23-26頁。

——「リファルの『イカアル』上演」『音楽世界』7巻10号、1935年10月、110-116頁。

——「黄吻録」『舞踊新潮』1巻6号、1935年10月、12-17頁。

——「マヌエラ・デル・リオと西班牙舞踊」『音楽世界』7巻11号、1935年11月、115-123頁。

——「西班牙舞踊覚書」『舞踊新潮』1巻8号、1935年12月、5-11頁。

——「マヌエラ デル・リオと西班牙舞踊」『会館芸術』4巻12号、1935年12月、6-11頁。

——「黄吻録」『舞踊新潮』2巻2号、1936年3月、22-24頁。

——「黄吻録」『舞踊新潮』2巻4号、1936年5月、25-29頁。

- 「『ノヴェエルの手紙』掲載に就て」『舞踊新潮』2巻5号、1936年6月、34-35頁。
- 「黄吻録」『舞踊新潮』3巻6号、1936年7月、29-32頁。
- 「アルヘンチイナを悼ふ」『舞踊新潮』2巻8号、1936年9月、9-11頁。
- 「アルヘンチイナを憶ふ」『音楽世界』8巻9号、1936年9月、123-128頁。
- 「来朝するクルト・イヨス舞踊団」『舞踊新潮』2巻10号、1936年11月、2-5頁。
- 「黄吻録」『舞踊新潮』2巻9号、1936年10月、14-15頁。
- 「最近の舞踊書」『舞踊新潮』3巻7号、1937年7月、27-30頁。
- 「ロルフ・ド・マレと語る」『舞踊新潮』4巻2号、1938年2月、24-25頁。
- 「今年の舞踊界回顧」『音楽世界』11巻12号、1939年12月、28-34頁。
- 秋田雨雀「俳優として舞踊家としての猿之助君」『演芸画報』9巻10号、1922年10月、38-40頁。
- 渥美清太郎「羽衣会の第一日」『演芸画報』12巻5号、1925年5月、78-79頁。
- 渥美清太郎「日本舞踊の改革（インタビュー）」『舞踊芸術』3巻9号、1937年9月、12-15頁。
- 渥美清太郎・牛山充・江口博他「春のシーズン批判座談会」『舞踊芸術』4巻6号、1938年6月、16-28頁。
- 吾妻徳穂・西形節子・村松道弥他「大正期の新舞踊」『舞踊学』増刊号第1巻、1999年、58-60頁。
- 阿部逸民「松竹楽劇部の新舞踊」『演芸画報』10巻5号、1923年5月、118-119頁。
- 天之岩戸「サカロフに就て」『音楽倶楽部』1巻9号、1934年9月、22頁。
- 飯島正「見世物談義」『舞踊新潮』2巻1号、1936年1月、2-3頁。
- 「見世物談義」『舞踊新潮』2巻2号、1936年3月、5-6頁。
- 飯塚友一郎「時局に処する舞踊家の覚悟」『舞踊芸術』4巻9号、1938年9月、1-3頁。
- 飯塚友一郎・佐々木孝丸・近藤春雄他「舞踊放談会」『舞踊芸術』4巻10号、1938年10月、34-39頁。
- 飯塚友一郎・小寺融吉・花柳徳兵衛他「舞踊文化の諸問題」についての懇談会『舞踊芸術』5巻6号、1939年6月、10-21頁。
- 生田葵「猿之助の旗揚げに」『演芸画報』9巻10号、1922年10月、46-47頁。
- 池谷作太郎「皇紀二千六百年奉祝芸能祭奉祝舞踊の全貌に就いて」『舞踊芸術』6巻2号、1940年2月、7-10頁。
- 「皇紀二千六百一年、創作舞踊コンクールの成果について」『舞踊芸術』8巻5号、1942年5月、28-31頁。
- 石井香夢「羽衣会と踏影会を見るの記」『演芸画報』10巻5号、1923年5月、48-55頁。
- 「日本舞踊革新の前提」『音楽グラフ』2巻3号、1924年6月、14-15頁。
- 石井順三「反省のジアナリズム」『舞踊新潮』1巻2号、1935年6月、22-24頁。

- 「舞踊文化の史的考察」『舞踊芸術』4巻7号、1938年7月、1-9頁。
- 「舞踊統制の原則」『舞踊芸術』4巻10号、1938年10月、24-29頁。
- 「再び舞踊統制について」『舞踊芸術』4巻11号、1938年11月、1頁。
- 「舞踊断想」『舞踊芸術』5巻3号、1934年3月、26-27頁。
- 「芸能文化政策の基本問題」『舞踊芸術』6巻5号、1940年5月、22-28頁。
- 「近頃のこと」『舞踊芸術』6巻6号、1940年6月、4-7頁。
- 石井拍亭「芸術に現れた舞踊」『中央美術』8巻2号、1922年3月、52-60頁。
- 石井漠「スミルノヴァの舞踊」『新演芸』1916年8月、84-85頁。
- 「喜歌劇印象記」『新演芸』1917年1月、85-88頁。
- 「伯林の舞踊生活」『新演芸』1923年7月、44-45頁。
- 「淋しがりの舞踊」『サンデー毎日』1923年8月5日、17頁。
- 「伯林で観た舞踊」『サンデー毎日』1923年8月12日、16頁。
- 「ドイツの舞踊を観て」『サンデー毎日』1923年9月9日、17頁。
- 「新春随感」『舞踊芸術』5巻1号、1934年1月、34-36頁。
- 「クロイツベルクとペーデの舞踊」『音楽倶楽部』1巻5号、1934年5月、72頁。
- 「新しい国民舞踊の樹立」『舞踊芸術』8巻5号、1942年5月、20-24頁。
- 石井みどり「舞踊文化革新への思索と行動－教化的価値への再認識－」『舞踊芸術』8巻6号、1942年6月、12-18頁。
- 石割松太郎「新曲と新舞踊」『サンデー毎日』1924年3月9日、27頁。
- 市川猿之助「春秋座の希望」『舞台評論』20号、1922年12月、42-47頁。
- 「舞踊素描」『舞踊の国』1巻1号、1934年11月、56-59頁。
- 「新舞踊『蟲』の創作について－正確なる記録を遺すための稿－」『日本舞踊』日本舞踊社、1940年7月、29-31頁。
- いづみ生「ローシイ氏の歌劇団」『新演芸』1916年5月、1921年5月、19-21頁。
- 伊藤松雄「ルシアン・バレエの噂」『新演芸』1922年9月、30-31頁。
- 伊藤道郎「舞踊芸談」『音楽世界』11巻11号、1939年(11)月、40-41頁。
- 今泉静江「『モルモット』に譬へられた藤間静枝さんと新舞踊」『サンデー毎日』1923年1月10日、6頁。
- 今儀謹次郎「新舞踊『蟲』の作曲から上演まで(一)」『日本舞踊』日本舞踊社、1940年7月、31-32頁。
- 「新舞踊『蟲』の作曲から上演まで(二)」『日本舞踊』日本舞踊社、1940年8月、28-32頁。
- 今中寛司「(解説)真仁法親王日記」『妙法院資料 第四巻』吉川弘文館、1979年、7-15頁。
- 伊庭孝「パヴロワに対する批評家の短見を悪む、」『セレナーデ』6号、1922年10月、8-10頁。

- ウイグマン,マリイ「独逸舞踊の意義」中村秋一(訳)、『音楽倶楽部』3巻11号、1936年11・12月、69-73頁。
- 「独逸舞踊の意義(2)」中村秋一(訳)、『音楽倶楽部』4巻1号、1937年1月、80-84頁。
- 「独逸舞踊の意義(3)」中村秋一(訳)、『音楽倶楽部』4巻2号、1937年2月、70-79頁。
- 「独逸舞踊の意義(下)」中村秋一(訳)、『音楽倶楽部』5巻1号、1938年1月、42-49頁。
- 上田長太郎「大阪廓の踊と演舞場の起源」『上方』4号、1931年4月、80-84頁。
- 上野房子「アートとショービジネスの間でーダンス揺籃期ロサンゼルスにG・V・ローシー」『大正演劇研究』8号、明治大学大正演劇研究会、2000年、86-103頁。
- 牛山充「スペイン舞踏」『会館芸術』(グラナドス號)2巻3号・第12輯、1933年3月、3頁。
- 「ルス・ペイジー人及びその芸術」『会館芸術』3巻5号、1934年5月、10-16頁。
- 榎茂都梅咲「インタビュー&インタビュー」『オール関西』17巻5号、2000年10月、10-11頁。
- 榎茂都扇性「榎茂都派の舞振は■此「浦島」を演ず」『名家演芸ひかへ帳』1910年、229-245頁。
- 海野弘「世界と東京、1920年代」『芸術新潮:特集 世界が恋する1920年代』1988年4月、57-61頁、64-69頁。
- 江川幸一「クロイツベルクその他」『会館芸術』3巻5号、1934年5月、18-19頁。
- 江口隆哉「クロイツベルク氏を語る」『音楽世界』6巻4号、1934年4月、64-65頁。
- 「物体舞踊」『音楽世界』7巻11号、1935年11月、124-125頁。
- 「時代の舞踊を」『音楽倶楽部』3巻9号、1936年9月、83-84頁。
- 「随筆:舞踊研究生達へ」『舞踊芸術』4巻12号、1938年12月、20-22頁。
- 「舞踊と演劇の交流」『会館芸術』9巻6号、1940年6月、24-26頁。
- 「国民舞踊の創成ー思ひつくままー」『舞踊芸術』8巻5号、1942年5月、6-11頁。
- 江口隆哉・宮操子「マリイ・ウイグマン 及びその舞踊学校について、『会館芸術』3巻5号、1934年5月、16-17頁。
- 江口博「唇と腹と」『舞踊新潮』1巻3号、1935年7月、29-30頁。
- 「舞踊の見方ー第六章・新舞踊(下)」『音楽世界』7巻10号、1935年10月、100-109頁。
- 「舞踊時評」『音楽世界』7巻11号、1935年11月、111-114頁。
- 「舞踊時評」『音楽世界』7巻12号、1935年12月、102-103頁。

- 江口博・蘆原英了・森満二郎他「昭和十年の舞踊界を語る」『音楽世界』7巻12号、1935年12月、108-125頁。
- 「舞踊時評」『音楽世界』8巻1号、1936年1月、175-177頁、103頁。
- 「西洋舞踊とは？－舞踊の見方・第七章」『音楽世界』8巻1号、1936年1月、188-198頁。
- 「舞踊時評」『音楽世界』8巻4号、1936年4月、112-115頁。
- 「頭と肉体の問題」『舞踊新潮』2巻4号、1936年5月、20-22頁。
- 「非常時局と舞踊界：舞踊時評」『音楽世界』8巻9号、1936年9月、135-140頁。
- 「舞踊時評」『音楽世界』9巻1号、1937年1月、157-160頁。
- 「日本舞踊連盟の誕生」『音楽世界』9巻2号、1937年2月、132-134頁。
- 「舞踊時評」『音楽世界』9巻3号、1937年3月、144-148頁。
- 「舞踊界の底流」『音楽世界』9巻7号、1937年7月、143-147頁。
- 「非常時局の舞踊界」『音楽世界』9巻9号、1937年9月、112-119頁。
- 「献金舞踊会と軍国舞踊」『音楽世界』9巻11号、1937年11月、98-100頁。
- 「新舞踊界の現状」『音楽世界』9巻12号、1937年12月、117-119頁。
- 「古典舞踊を護るもの」『舞踊新潮』3巻10号、1937年11月、10-12頁。
- 「舞踊断想」『舞踊芸術』3巻11号、1937年12月、20-22頁。
- 「非常時第二年の舞踊界」『舞踊芸術』4巻1号、1938年1月、1-3頁。
- 「舞踊コンクールに就て」『音楽世界』11巻2号、1939年2月、98-100、43頁
- 「舞踊一年の回想」『舞踊芸術』8巻1号、1942年1月、20-22頁。
- 「昭和十七年度 舞踊一年小史」『舞踊芸術』8巻12号、1942年12月、22-27頁。
- 「洋舞五十年(24)」『現代舞踊』13巻3号、1965年3月、8-11頁。
- 「洋舞五十年(28)」『現代舞踊』13巻7号、1965年7月、8-11頁。
- 「洋舞五十年(44)」『現代舞踊』15巻1号、1967年1月、6-9頁。
- 「洋舞五十年(45)」『現代舞踊』15巻2号、1967年2月、6-9頁。
- 「洋舞五十年(56)」『現代舞踊』16巻3号、1968年3月、8-11頁。
- 大阪演劇連盟「大阪演劇連盟：宣言」『舞台評論』20号、1922年12月、附録のため頁なし。
- 大崎鶴永「新舞踊劇《和歌の浦》に就て」『演芸画報』、8巻6号、1921年6月、68-69頁。
- 大島得郎「踏影会第二公演と演題」『新演芸』、1923年3月、71-73頁。
- 太田黒元雄「ニジンスキイ」『新演芸』1916年7月、22-23頁。
- 「露国舞踊を観て」『新演芸』1916年8月、82-83頁。
- 大谷竹次郎「新しい観客と共に」『新演芸』1919年1月、14-15頁。
- 大塚健吉「家元制度の崩壊（序説）－前進せぬ新舞踊界－」『舞踊芸術』3巻5号、1937年5月、26-28頁。
- 大山功「日本的舞踊意識に就いて」『舞踊芸術』8巻6号、1942年6月、38-41頁。

- 「舞踊に於ける日本的なもの」『舞踊芸術』8巻9号、1942年9月、24-28頁。
- 「国民舞踊の一方向」『舞踊芸術』9巻1号、1943年1月、30-33頁。
- 岡田七郎「榎茂都陸平氏への言ひ分」『舞踊新潮』2巻4号、1936年5月、23-25頁。
- 「泥を投げ返す」『舞踊新潮』3巻4号、1937年4月、21-25頁。
- 岡田八千代「新舞踊家としての猿之助=福助」『演芸画報』10巻3号、1923年3月、43-44頁。
- 小山内薫「「新劇場」に就いての対話」『新演芸』1916年8月、30-33頁。
- 「劇場茶話」『新演芸』1919年9月、22-23頁。
- 「劇場茶話」『新演芸』1920年3月、6-7頁。
- 「新舞踊断片」『新演芸』1922年2月、20-21頁。
- 「露西亜舞踊団と画家」『中央美術』8巻2号、1922年3月、12-21頁。
- 「アンナ・パウロワの「白鳥」、『演芸画報』9巻10号、1922年10月、80頁。
- 小山内薫・山田耕筰「踏影会の新舞踊を見て」『新演芸』1923年5月、88-93頁。
- 尾崎宏次「舞踊界最近の動向」『会館芸術』10巻3号、1941年3月、26-27頁。
- 尾上菊五郎「人としてのパヴロワ夫人」『新演芸』1922年10月、61頁。
- 折口信夫「歌舞伎とをどり」『舞踊芸術』5巻6号、1934年6月、4-5頁。
- 貝谷和昭「新しき舞踊の指導性」『舞踊芸術』6巻3号、1940年3月、10-13頁。
- 鹿島清兵衛「和洋楽合奏の道成寺」『新演芸』1921年6月、68-71頁。
- 勝本清一郎「舞台舞踊の近況に関して」『演芸画報』9巻2号、1922年2月、14-20頁。
- 「新舞踊「蟲」に就て」『演芸画報』9巻1号、1922年1月、106-112頁。
- 香取仙之助「舞踊について一言」『新舞踊』1922年2月、33-34頁。
- 上笙一郎「児童舞踊」の島田豊『日本古書通信』880号、2002年11月、10-11頁。
- 河合信雄「レビューとしての少女歌劇（一）」『舞踊芸術』4巻10号、1938年10月、16-20頁。
- 川口繁「ジヨセフイン・バアケルに就て」『舞踊新潮』2巻5号、1936年6月、23-24頁。
- 川路柳虹「ローシー氏の喜歌劇団」『新演芸』1917年7月、16-18頁。
- 「「サロメの裳の舞」—(ステルリツク嬢の踊舞について)—」『新演芸』1917年7月、41-43頁。
- 「宝塚少女歌劇万歳！」『新演芸』1918年7月、94-95頁。
- 河田清史「舞踊的記述の困難から」『音楽世界』9巻1号、1937年1月、161-163頁。
- 川端康成「舞踊映画」『舞踊新潮』創刊号、1935年5月、2頁。
- 「舞踊劇一案」『舞踊新潮』1巻4号、1935年8月、2-3頁。
- 如月敏「宝塚の作者たち」『舞踊新潮』1巻3号、1935年7月、15-17頁。
- 「雑記」『舞踊新潮』2巻2号、1935年3月、3-4頁。
- 岸田辰彌「伊藤道郎と私」『会館芸術』（ミチオ・イトウ号）1巻5号、1931年5月、8頁。
- 喜多村生「踏影会の印象」『舞台評論』25号、1923年5月、19頁。

- 邦正美「ナチス・ドイツに於ける芸術統制に就いて－舞踊を中心に－」『舞踊芸術』5巻1号、1934年1月、12-20頁。
- ――― 「ナチス・ドイツに於ける芸術統制に就いて（二）－舞踊を中心に－」『舞踊芸術』5巻1号、1934年2月、1-7頁。
- ――― 「メリー・ヴィグマンの新作のこと等：随筆（冬のベルリン）」『舞踊芸術』5巻3号、1934年3月、36-38頁。
- ――― 「教育舞踊と舞踊教育」『音楽世界』8巻8号、1938年8月、87-90頁。
- 國崎彩、大正期の寶塚少女歌劇團の舞踊活動についての考察、『演劇研究センター紀要Ⅷ早稲田大学 21世紀 COE プログラム＜演劇の総合的研究と演劇学の確立＞』第8巻、2007年1月、311-329頁。
- 栗山淳「超人になれなかった小英雄：日本の1920年代とアバンギャルド村山知義」『大正演劇研究』3号、明治大学大正演劇研究会、1990年、31-46頁。
- 桑原和美「昭和時代初期の舞踊－川端康成を通して－」『舞踊学』12号、1989年、7-18頁。
- ――― 「榎茂都陸平の欧米視察－1930年代のヨーロッパに於ける日本舞踊の紹介－」『研究年報』13号、就実女子大学教養課程、1996年3月、25-58頁。
- ――― 「榎茂都陸平の欧米視察（Ⅱ）－ヨーロッパで観た舞踊について－」『研究年報』18号、就実女子大学教養課程、2001年6月、43-108頁。
- ――― 「年譜考証 榎茂都陸平と近代舞踊（一）」『就実大学史学論集』20号、2005年7月、133-168頁。
- ――― 「年譜考証 榎茂都陸平と近代舞踊（二）」『就実大学史学論集』23号、2008年7月、87-172頁。
- ――― 「榎茂都陸平の宝塚時代－「春から秋へ」の舞踊構想－」『館報池田文庫』2008年4月、20-23頁。
- 神戸圭子「日本の現代舞踊の流れ－村山知義を通して見たドイツ・ノイエタンツと舞踏」『大正演劇研究』3号、明治大学大正演劇研究会、1990年、47-63頁。
- 香山知子「ダルクローズのリズム教育－音楽と身体の動きを中心に－」『舞踊学』第5号、1982年6月、30-31頁。
- 香夢生「名人パブリアの踊る一夜」『演芸画報』9巻10号、1922年10月、83-85頁。
- 小竹哲「レビュー前夜－唱歌そしてオペラの夢－」『上方芸能』181号、2011年9月、29-32頁。
- 小寺融吉「舞踊界の新機運」『演芸画報』9巻2号、1922年2月、9-15頁。
- ――― 「猿之助氏と舞踊」『演芸画報』9巻10号、1922年10月、49-50頁。
- ――― 「新舞踊は失敗」『サンデー毎日』1923年4月1日、19頁。
- ――― 「歌舞伎と新作の舞踊」『演芸画報』28巻5号、1934年5月、6-7頁。
- ――― 「新しい舞踊と民謡」『音楽世界』11巻3号、1939年3月、45-47頁。
- 小林一三「日本歌劇の創設」『新演芸』1918年5月、114-116頁。

- 小林愛雄「世界民衆の舞踏」『中央美術』8巻2号、1922年3月、36-49頁。
- 小森敏「パリの舞踊界」『音楽世界』8巻5号、1936年5月、123-126頁。
- 今東光「宝塚の思い出」『宝塚』1964年12月、7-11頁。
- 近藤孝太郎「現代日本の舞踊界の傾向」『音楽世界』8巻1号、1936年1月、178-187頁。
- 「江口隆哉と一問一答」『舞踊新潮』2巻6号、1936年7月、36-38頁。
- 「郷土舞踊から我等は何を得べきか」『音楽世界』8巻7号、1936年7月、91-100頁。
- 「舞踊の伴奏音楽（二）」『音楽世界』9巻1号、1937年1月、164-171頁。
- 「異民族の舞踊と国民性」『音楽世界』9巻12号、1937年12月、105-112頁。
- 「舞踊に於ける写生」『舞踊芸術』6巻2号、1940年2月、22-29頁。
- 「舞踊連盟のことども」『舞踊芸術』7巻4号、1941年4月、24-34頁。
- 「舞踊連盟改組論」『舞踊芸術』7巻5号、1941年5月、8-17頁。
- 「舞踊批評家群の訓練と活用—「舞踊界再組織の指標」として—」『舞踊芸術』8巻2号、1942年2月、10-20頁。
- 近藤春雄「文化統制と独逸舞踊」『音楽世界』10巻1号、1938年1月、45-50頁。
- 「舞踊革新の書—主として日本舞踊のために—」『舞踊芸術』4巻10号、1938年10月、8-13頁。
- 「舞踊革新の書—主として西洋舞踊のために—」『舞踊芸術』4巻11号、1938年11月、4-10頁。
- 「ナチス・ドイツの舞踊統制」『舞踊芸術』4巻12号、1938年12月、1-5頁。
- 「日本的バレエの展望—随想風に—」『舞踊芸術』5巻1号、1939年1月、38-43頁。
- 「宝塚伯林公演について—小林一三氏に與ふ—」『舞踊芸術』5巻1号、1939年2月、54-56頁。
- 齋藤佳三「欧州で見た踊りの印象」『新演芸』1916年4月、20-26頁。
- 「近代舞踊と私の新作に就て」『中央美術』8巻2号、1922年3月、112-119頁。
- 「藤蔭会の舞踊を見て」『演芸画報』9巻11号、1922年11月、28-30頁。
- サカロフ、クロチルド「私達の舞踊について（葦原英了訳）」『会館芸術』3巻10号、1934年10月、18-21頁。
- 佐藤多紀三「新舞踊運動の思想」『舞踊学』増刊号第1巻、1999年、64-65頁。
- 佐藤寅雄「日本のレビュー」『新興芸術研究』3号、1931年12月、33-60頁。
- 「転換期にある舞踊界への一批判」『音楽世界』9巻4号、1937年4月、62-65頁。
- 佐藤みね子「パラダイスの女」『新演芸』1919年9月、75頁。
- 猿谷要「ジャズとアスピリンの20年代」『芸術新潮：特集 世界が恋する1920年代』1988年4月、12-19頁。
- 澤村宗之助「英語劇『シーザー』」『新演芸』1921年6月、77-79頁。

- 鹽入亀介「舞踊批評家を試験したい」『舞踊新潮』1巻4号、1935年8月、7-11頁。
- 執行正俊「ヴァイクマン舞踊学校の実際に就て」『音楽倶楽部』2巻6号、1935年6月、26-29頁。
- 「独逸の野外舞踊」『会館芸術』8巻7号、1939年7月、4頁。
- 島崎藤村「舞踊を尊重せよ」『新演芸』1920年7月、12-14頁。
- 島田豊「国民舞踊の樹立について」『舞踊芸術』8巻5号、1942年5月、14-15頁。
- 島中好樹「レビュー芸術論」『音楽世界』8巻9号、1936年9月、81-83頁。
- シュミット, ヨッヘン「1920年代のドイツ表現主義舞踊—バウハウス・オイリュトミー・リトミックなどに関連して—」(渡辺知也訳)『舞踊学』10号、1987年、45-54頁。
- 白井鐵造・蘆原英了「レビューと少女歌劇を語る」『音楽世界』7巻10号、1935年10月、85-91頁。
- 白井松次郎「新築落成した松竹座に就いて」『演芸画報』10巻6号、1923年6月、134-135頁。
- 白館旗夫「白井鐵造と榎茂都陸平」『舞踊新潮』2巻5号、1936年6月、22-23頁。
- 新谷誠太郎「俣艸榎茂都扇性師匠」『上方』140号、1939年8月、31頁。
- 杉谷正道「舞踊劇に就いて」『舞踊新潮』1巻5号、1935年9月、15-16頁。
- せんのすけ「宝塚少女歌劇団の群」『新演芸』1918年1月、142-143頁。
- 曾田秀彦「巴里の小山内薫—バレエ・リュス体験—」『大正演劇研究』2号、明治大学大正演劇研究会、1982年、11-36頁。
- 外園康子「明治時代における唱歌教材の性格—「小学唱歌集」「小学唱歌」—」『教育學雑誌』3・4巻、日本大学教育学会、1970年、63-83頁。
- 曾野功「春秋座の新舞踊」『サンデー毎日』1922年11月12日、12頁。
- 高尾亮雄「この夏のリトミック講習—模倣から創造へ」『会館芸術』第3輯、1931年9月、24頁。
- 高木喬「ノイエタンツの日本的行衛」『舞踊新潮』3巻10号、1937年11月、29頁。
- 高澤初風「新舞踊家よ土台を作れ」『舞踊芸術』4巻5号、1938年5月、4-6頁。
- 高原慶三「関西の新舞踊運動:「モルモット」は役者よりも芸妓に」『サンデー毎日』1923年6月10日、12頁。
- 武石みどり「原田潤—その筆跡と生涯」『東京音楽大学研究紀要』23号、1999年、1-23頁。
- 多田久男「花柳寿輔氏と語る」『舞踊新潮』創刊号、1935年5月、9-11頁。
- 田中良「音楽美と色彩美:新しく見た舞踊劇」『新演芸』1921年11月、8-9頁。
- 「新舞踊の舞台装置」『新舞踊』1922年2月、25-27頁。
- 「舞踊劇の一装置者として—羽衣会の『夢』その他に就き—」『演芸画報』9巻3号、1922年3月、10-12頁。
- 「新作舞踊<蟲>に関連した思い出—市川猿翁を偲んで—」『現代舞踊』11巻8号、1963年8月、22-24頁。

- 田辺尚雄「ハアモニイの欠けた日本舞踊」『演芸画報』9巻2号、1922年2月、27-28頁。
 —— 「新舞踊「死魔の踊」を見て」『演芸画報』12巻5号、1925年5月、80頁。
- 多村誠「榎茂都陸平のバレエと堀正旗の転向—宝塚十一月公演評—」『舞踊新潮』1巻8号、
 1935年12月、29-31頁。
- 津金澤聰廣「“非常時日本”の宝塚研究」『ユリイカ』第33巻5号（通巻446号）、2001年5
 月、180-181頁。
- 津田信敏「独逸舞踊界の近況に就いて（二）」『舞踊芸術』4巻6号、1938年6月、10-13頁。
 土屋充「パヴロワ夫人の舞踊」『舞台評論』18号、1922年10月、16-19頁。
- 坪内士行「劇界漫語」『舞台評論』20号、1922年12月、1-7頁。
- 坪内逍遙「日本舞踊改造の最後の一策」『演芸画報』7巻1号、1920年1月、2-13頁。
 —— 「日本舞踊の行くべき道」『演芸画報』9巻2号、1922年2月、2-6頁。
 —— 「劇壇の動揺と新舞踊」『セレナーデ』2号、1922年3月、32-33頁。
 —— 「新舞踊に就いて」『サンデー毎日』1922年4月9日、15-20頁。
 —— 「今後の芸術界」『サンデー毎日』1923年11月11日、23-24頁。
- 寺川信「アンナハプロアの来朝を待ちつゝ」『舞台評論』10号、1922年2月、8-11頁。
 —— 「露西亞舞踊と日本舞踊の前途」『舞台評論』17号、1922年9月、9-13頁。
 —— 「舞踊を毒する「所謂新舞踊」運動を排す」『舞台評論』25号、1923年5月、9-11
 頁。
- 東條愛「ロンドンの伊藤道郎」『大正演劇研究』7号、明治大学大正演劇研究会、1998年、
 74-91頁。
- 中井浩水「回頭 春の踊」『上方』4号、1931年4月、74-79頁。
- 中井駿二「サカロフの芸術について」『会館芸術』3巻10号、1934年10月、8-10頁。
 —— 「舞踊の危機」『音楽世界』9巻1号、1937年1月、50-59頁。
- 永田龍雄「パヴロワ夫人の印象」『演芸画報』9巻10号、1922年10月、80-83頁。
 —— 「白文鳥のやうな舞踊家ルウス・ページ」『大阪朝日新聞』1928.9.30、15面。
 —— 「舞姫グラナドス」『会館芸術』（グラナドス號）2巻3号・第12輯、1932年3月、
 4-6頁。
 —— 「将来の劇場舞踊」『演芸画報』28巻5号、1934年5月、4-5頁。
 —— 「十三年度舞踊界の願望」『音楽世界』10巻12号、1938年12月、28-33頁。
- 中西武夫「私の親友ハンス・フイト」『舞踊芸術』2巻4号、1936年4月、28-29頁。
- 中野祐子「新教育思想と舞踊教育—玉川学園・小原國芳の論と実践を中心として—」『島根
 大学教育学部紀要』（教育科学編）18巻、1984年12月、31-45頁。
 —— 「日本体育会・赤間雅彦の舞踊教育—大正・昭和前期において—」『島根大学教育
 学部紀要』（教育科学編）20巻、1986年12月、127-139頁。
 —— 「大正・昭和前期の舞踊教育—日本体育会・石橋蔵五郎・赤間雅彦について—」『舞
 踊学』第10号、1987年12月、24-31頁。

- 中村歌右衛門「舞踊劇「羽衣会」」『演芸画報』9巻1号、1922年1月、178-179頁。
——「第二回の羽衣会」『新演芸』1923年3月、69-70頁。
- 中村秋一「維納芸術舞踊団を観る」『音楽倶楽部』1巻5号、1934年5月、73頁。
——「松竹と宝塚(上)」『音楽倶楽部』1巻9号、1934年9月、18-20頁。
——「松竹と宝塚(中)」『音楽倶楽部』1巻10号、1934年10月、18-20・22頁。
——「松竹と宝塚(下)」『音楽倶楽部』1巻11号、1934年11月、18-19・26頁。
——「レビュー評」『音楽倶楽部』1巻11号、1934年11月、20-21頁。
——「現代舞踊界の欠陥」『音楽倶楽部』2巻8号、1934年8月、54-57頁。
——「舞踊劇と二つのバレエ」『音楽倶楽部』2巻1号、1935年1月、18-19頁。
——「舞踊とレビュー」『音楽倶楽部』3巻8号、1936年8月、90-94頁。
——「舞踊概論」『舞踊芸術』3巻4号、1937年5月、14-17頁。
——「舞踊鑑賞読本(一)」『音楽倶楽部』4巻6号、1937年6月、51-59頁。
——「マリイ・ヴィグマン」『舞踊芸術』3巻5号、1937年5月、14-19頁。
——「新舞踊一夕話」『舞踊芸術』8巻6号、1942年6月、45-51頁。
——「舞苑落穂抄」『舞踊芸術』8巻9号、1942年9月、20-24頁。
——「藤蔭静枝と藤蔭会—新日本舞踊舞踊史—」『舞踊芸術』8巻9号、1942年9月、30-39頁。
- 中村福助「羽衣会の第一運動」『新舞踊』1922年2月、36-37頁。
——「パヴロワ夫人とわたし」『サンデー毎日』1922年10月1日、19頁。
——「何度でも見たい」『新演芸』1922年10月、63頁。
- 西川忠宏「日本・西洋と云ふ舞踊分類名」『舞踊新潮』3巻7号、1937年7月、22-24頁。
——「独逸派舞踊を想ふ」『音楽世界』6巻4号、1934年4月、32-37頁。
- 西田眞三郎「日本舞踊の未来私観」『新舞踊』1巻3号、1923年10月、14-16頁。
- 仁和陽「日本舞踊界の貧困性」『舞踊新潮』1巻7号、1935年11月、13-15頁。
——「古典舞踊に就て」『舞踊新潮』2巻1号、1936年1月、16-17頁。
——「我が舞踊界は何故発展しないか」『舞踊新潮』三周年記念号、1937年5月、27-29頁。
——「民族的舞踊観の樹立」『舞踊新潮』3巻7月、1937年7月、25-26頁。
- 野口米次郎「「神様は踊り給ふ」を論じてミチオ・イトウに及ぶ」『会館芸術』(ミチオ・イトウ號)1巻5月号、1931年5月、2頁。
- 袴田麻祐子「「レビュー」の変遷」『ユリイカ』第33巻5号(通巻446号)、2001年5月、182-194頁。
- 白象生「舞踊界近事」『新演芸』1921年1月、194-195頁。
- ハスケル, アーノルド・エル「バレエ論」河合信雄(訳)『舞踊芸術』7巻8号、1940年8月、16-31頁。
——「バレエ論(二)」河合信雄(訳)『舞踊芸術』7巻10号、1940年10月、20-30頁。

- 長谷川良夫「舞踊音楽の問題」『舞踊新潮』1巻2号、1935年6月、33-34頁。
- 波多海藏「舞踊に求めるもの—最近の国民精神と日本舞踊協会と」『舞踊の国』1巻1号、1934年11月、18-19頁。
- 花柳壽楽・若柳壽延・佐藤多紀三他「既成流派の活動—花柳舞踊研究会の発足を中心に—」『舞踊学』増刊号第1巻、1999年、72-76頁。
- 花柳珠実「舞踊の心と音楽」『大阪朝日新聞』1930年12月7日、11面。
- 花柳徳兵衛「植民地政策と舞踊」『舞踊芸術』5巻3号、1934年3月、23-25頁。
- 林きむ子「遠くに行つた新舞踊」『舞踊新潮』3巻10号、1937年11月、3-4頁。
- 原奎一郎「群舞妄断」『舞踊新潮』2巻11号、1936年12月、11-12頁。
- ハンスティング, ハンス「舞踊と音楽の結合—現代の創造的意志—」小原二郎(訳)『音楽世界』6巻4号、1934年4月、38-41頁。
- 「マリー・ウィグマンのノイエ・タンツに於ける音楽」青山唯一(訳)『舞踊新潮』3巻9月号、1937年9月、8頁。
- 原田佳明「日本舞踊の特性をどう外国に紹介するか—巴里の日本舞踊展に行くに際して—」『音楽世界』10巻4号、145頁。
- 肥田皓三「河合ダンス物語」『大阪春秋』102号、2001年3月、50-55頁。
- 檜健次「舞踊行脚」『音楽世界』9巻2号、1937年2月、80-84頁。
- 平沢信康「初期文化学院における舞踊教育実践について—山田耕筰による「舞踊詩」の試み—」『鹿屋体育大学学術研究紀要』34、9-29頁。
- 平野萬里「舞台の詩、舞踊劇」『新演芸』1922年2月、22-24頁。
- 弘田龍太郎「世界的な舞踊の芽」『新舞踊』1922年2月、38頁。
- 「舞踊のリズムの解剖」『新演芸』1922年7月、30-33頁。
- 深井史郎「新舞踊の音楽と踊」『舞踊新潮』1巻2号、1935.6、32-33頁。
- 「舞踊曲「都会」の作曲」『会館芸術』9巻6号、1940年6月、30-31頁。
- 福地信世「羽衣会を見る」『新舞踊』1922年4月、52-53頁。
- 「新舞踊解剖論」『新演芸』1923年5月、104-109頁。
- 藤井邦男「宝塚少女歌劇団・日本で生れた奇蹟的歌劇団」『新演芸』1918年4月、83-85頁。
- 藤蔭満洲野「歌舞伎末期から新舞踊まで」『舞踊芸術』8巻9号、1942年9月、40-43頁。
- 藤田進一郎「ダンス芸術」『会館芸術』(ミチオ・イトウ號)1巻5月号、1931年5月、4頁。
- 藤間静枝「『思凡』に就いて」『演芸画報』8巻8号、1921年8月、99-101頁。
- 「藤蔭会の新舞踊」『演芸画報』8巻2号、1921年2月、54-56頁。
- 「『思凡』を舞台まで」『新演芸』1921年7月、118-119頁。
- 「新しい舞踊のモルモットとして」『演芸画報』9巻2号、1922年2月、29-32頁。
- 「新しい舞踊への試み」『新舞踊』1922年2月、39頁。
- ヴェルレ, ハンスユルゲン「ハラルド・クロイツベルクの人と芸術」(監入龜輔訳)『音楽

- 世界』6巻4号、1934年4月、42-58頁。
- 舞踊芸術社「事変下に舞踊を再検討する座談会」『舞踊芸術』4巻8号、1938年8月、10-20頁。
- 舞踊芸術社調査部「改正興行取締規則概説」『舞踊芸術』6巻3号、1940年3月、2-9頁。
- 「技芸者の許可制度について」『舞踊芸術』6巻6号、1940年6月、8-14頁。
- 「舞踊界事情」『舞踊芸術』6巻9号、1940年9月、26-29頁。
- 「東京府下舞踊家の現勢資料」『舞踊芸術』8巻5号、1942年5月、54頁。
- 「情報局国民演劇賞資料」『舞踊芸術』8巻5号、1942年5月、55-56頁。
- 「皇軍慰問芸能資料」『舞踊芸術』8巻5号、1942年5月、56-59頁。
- 古井戸秀夫「歌舞伎俳優の新舞踊」『舞踊学』増刊号第1巻、1999年、69-71頁。
- 堀正旗「新舞踊の烽火は何を燃やすか」『新舞踊』1巻3号、1923年10月、2-7頁。
- 前田三男「西洋音楽夜話：ターンノイザー」『サンデー毎日』1924年6月22日、9頁。
- 町田博三「舞踊劇と三弦楽の今後」『新演芸』1920年1月、16-17頁。
- 「文学化された舞踊：藤蔭会の「夜編笠」その他」『新演芸』1920年7月、124-125頁。
- 「藤蔭会の新運動」『新演芸』1921年1月、142-143頁。
- 「今日の踊と明日の踊」『演芸画報』8巻8号、1921年8月、108-111頁。
- 「新舞踊「蟲」に関する考察」『演芸画報』9巻1号、1922年1月、112-115頁。
- 「新舞踊の将来」『演芸画報』9巻2号、1922年2月、6-9頁。
- 「羽衣は大和錦かマントか」『演芸画報』9巻4号、1922年4月、8-13頁。
- 「羽衣会を観ての感想」『新演芸』1923年5月、101-103頁。
- 松居松葉「日本に於ける歌劇界の犠牲者・ローシー君を送る」『新演芸』1918年4月、6-12頁。
- 「日本に於ける今後の歌劇」『演芸画報』5巻6号、1918年6月、14-19頁。
- 「黄金国の春：世界芝居行脚」『新演芸』1920年1月、26-31頁。
- 松本幸四郎「団十郎と女優テオー」『新演芸』1921年6月、86-88頁。
- 「パヴロワ夫人の舞踊」『新演芸』1922年10月、62頁。
- 松本茂章「OSK ストーリー80年の夢 第28回「榎茂都陸平の舞踊人生」(上)」『大阪人』59巻10号、2005年10月、75-77頁。
- 「OSK ストーリー80年の夢 第29回「榎茂都陸平の舞踊人生」(下)」『大阪人』59巻11号、2005年11月、75-77頁。
- 松本千代栄・香山知子「明治期の舞踏的遊戯—その精神と技術の様相—」『舞踊学』第4号、1981年、1-9頁。
- 松本千代栄・安村清美「大正・昭和前期の舞踊教育—「遊戯」から「ダンス」へ—」『舞踊学』第6号、1983年、1-13頁。
- 松本千代枝・岡野理子「大正・昭和初期の舞踊教育—戸倉ハルとその時代—」『舞踊学』第

8号、1985年、17-23頁。

松山芳野里「テレジナの来朝に際して」『会館芸術』第5輯、1932年2月、15頁。

—— 「欧米土産話」『音楽世界』11巻11号、1939年(11)月、43-47頁。

マレ、ロルフ・ド「欧州における現代舞踊の発達(上)」光吉夏弥(通訳)『音楽世界』10巻3号、1938年3月、62-75頁。

—— 「欧州における現代舞踊の発達(中)」光吉夏弥(通訳)『音楽世界』10巻4号、1938年4月、78-88頁。

—— 「欧州における現代舞踊の発達(下)」光吉夏弥(通訳)『音楽世界』10巻6号、1938年6月、105-113頁。

丸山政男「舞踊と歌劇の殿堂「大劇場」とその今、明日の花形」『会館芸術』5巻1号、1936年1月、10-17頁。

三島章道「福助が舞踊研究会を始めるときいて—日本の舞踊の雑感—」『演芸画報』9巻2号、1922年2月、21-26頁。

—— 「新舞踊の勃興についての小感」『新舞踊』1922年2月、28-31頁。

—— 「舞踊雑感」『中央美術』8巻2号、1922年3月、91-95頁。

—— 「榮三郎=男女藏の舞踊小感」『演芸画報』10巻3号、1923年3月、44-49頁。

三島章道・近藤経一「羽衣会合評」『演芸画報』10巻5号、1923年5月、60-62頁。

光吉夏弥「デニス寸言」『帝劇』34号、1925年9月、14-16頁。

—— 「ルウス・ペイヂへの第一段階」『帝劇』70号、1928年9月、38-39頁。

—— 「舞踊時代か?(1)華やかな貧困」『都新聞』1933年9月8日、14面。

—— 「舞踊時代か?(2)舞踊家のアマチュア性と不勉強」『都新聞』1933年9月9日、14面。

—— 「舞踊時代か?(3)批評家と今後の問題」『都新聞』1933年9月10日、14面。

—— 「サカロフ夫妻伝」『会館芸術』3巻10号、1934年10月、14-17頁。

—— 「現代日本の舞踊への途—主として新日本舞踊について—」『会館芸術』7巻1号、1938年1月、22-27頁。

三宅周太郎「春秋座への願ひ」『新演芸』1922年1月、144-147頁。

武者小路実篤「ベルリンにて：クロイツベルヒの舞踊」『湖畔の画商』(『世界紀行文学全集』第8巻1979所収)1950年6月、甲文社、17頁。

村上忠久「映画に現れたる舞踊」『会館芸術』3巻10号、1934年10月、24-26頁。

—— 「大阪での「春妖夢」」『舞踊新潮』2巻6号、1936年7月、28-29頁。

村松静光「舞踊界註文帳」『舞踊新潮』創刊号、1935年5月、11-12頁。

村松道弥「大正期の新舞踊」『舞踊学』増刊号第1巻、1999年、55-57頁。

村山知義「ダンスの本質に就て」『中央美術』1923年7月、166-179頁。

本居長世「もつと自由に大胆であれ」『演芸画報』9巻2号、1922年2月、26-27頁。

- 「童謡と民謡の踊」『中央美術』8巻2号、1922年3月、107-110頁。
- 森満二郎「現代の舞踊界に就いて」『音楽世界』9巻1号、1937年1月、47-49頁。
- 森口多里「踏影会公演を観る」『演芸画報』10巻5号、1923年5月、56-60頁。
- 森田清波「紐育へ来た人達」『新演芸』1916年8月、24-28頁。
- 森田草平「《瀕死の白鳥》と《鷺娘》」『女性』1922年12月、80-91頁。
- 矢ヶ崎聡智「祝祭の時空：浅草オペラにみる異文化受容の日本の特性」『大正演劇研究』3号、
明治大学大正演劇研究会、1990年、93-116頁。
- 安村清美「芸術教育と舞踊教育－三浦ヒロの思想と実践－」『舞踊学』第7号、1984年、21-
28頁。
- 八田恭昌「踊るベルリン」『芸術新潮：特集 世界が恋する1920年代』1988年4月、46-54
頁。
- 柳澤健「羽衣会の印象－主としてクローデル大使の「女と影」について－」『新演芸』1923
年5月、94-100頁。
- 柳瀬壽「音楽と音響と」『舞踊新潮』1巻5号、1935年9月、16-17頁。
- 夜野雨人「踏影会所見」『舞台評論』25号、1923年5月、18頁。
- 山際靖「舞踊日本の悩み」『舞踊芸術』4巻10号、1938年10月、1-8頁。
- 山口林児「踏影会と羽衣会の舞台装置を基調とした考察」『演芸画報』10巻5号、1923年
5月、66-71頁。
- 山崎紫紅「猿之助のこと」『演芸画報』9巻10号、1922年10月、43-46頁。
- 山田耕作「舞踊詩と舞踊劇（一）」『新演芸』1916年8月、34-35頁。
- 「禽獣の舞踊と植物の舞踊」『サンデー毎日』1922年4月2日、15頁。
- 「純舞踊のために「書き卸し」の音楽」『サンデー毎日』1922年4月16日、14頁。
- 「日本の秋を訪れるパヴローヴァの舞踊」『サンデー毎日』1922年9月3日、10
頁。
- 山野英嗣「1920年代大阪・神戸断章」『1920年代・日本展』1988年、201-203頁。
- 山本久三郎「猿之助君の有楽座出演に就て」『演芸画報』9巻10号、1922年10月、40-43
頁。
- 「舞踊と時局」『舞踊芸術』4巻5号、1938年5月、1-3頁。
- 「事変下の舞踊界」『舞踊芸術』4巻11号、1938年11月、2-3頁。
- 「日本植民地文化協会誕生・その他」『舞踊芸術』5巻3号、1939年3月、1-3頁。
- 「帝国劇場懐旧談」『舞踊芸術』5巻3号、1939年3月、16-22頁。
- 吉田謙吉「踏影会と羽衣会の舞台装飾」『演芸画報』10巻5号、1923年5月、62-66頁。
- 美野一白「関西一の男振附 鶯集庵榎茂都扇性一及び其門弟連一」『新演芸』1916年5月、
102-109頁。
- 「今の坪内操子の新舞踊劇」『新演芸』1921年6月、102-103頁。
- 四谷左門「舞踊界を斬る（一）」『音楽倶楽部』1巻5号、1934年5月、20頁。

- 「ロオジイのこと」『舞踊新潮』2巻4号、1936年5月、15-18頁。
- 魯鷄子「榎茂都流の舞踊」『演芸画報』8巻2号、1921年2月、46-52頁。
- 和歌乙鳥「浪花三廓春の踊：新町浪花踊」『新演芸』1916年5月、71-72頁。
- 「蘆邊踊と浪花踊」『新演芸』1918年5月、82-85頁。
- 渡辺裕「坪内逍遙・宝塚歌劇・大阪文化—もう一つの日本近代史」『文学』1巻5号、2000年9月、43-54頁。
- 「「宝塚アイデンティティ」の形成とオリエンタリズム」『ユリイカ』第33巻5号（通巻446号）、2001年5月、202-209頁。
- (筆者名なし)「宝塚少女歌劇の帝劇公演に就て」『新演芸』1921年5月、90-91頁。
- 「両氏が宝塚を出る迄」『セレナーデ』創刊号、1921年11月、24-33頁。
- 「松竹楽劇研究所生る」『セレナーデ』創刊号、1921年11月、41頁。
- 「パヴロワ夫人の来朝」『セレナーデ』2号、1922年2月、29頁。
- 「露西亜舞踊の音楽とレコード」『セレナーデ』2号、1922年2月、33頁。
- 「ベートーフェンの作品とレコード」『セレナーデ』4号、1922年4月、14-15頁。
- 「松竹楽劇研究所を訪ふ」『セレナーデ』4号、1922年4月、24-27頁。
- 「新舞踊への首都 初舞台に立つ松竹楽劇部の少女」『大阪朝日新聞』1922年10月16日、7面。
- 「晴れの処女公演を前に」『大阪朝日新聞』1922年10月20日夕刊、2面。
- 「新舞踊「小さき謀反」と「時」の舞台面」『大阪朝日新聞附録』1922年10月23日、2面。
- 「美しい新舞踊 『時』と『小さき謀反』」『大阪朝日新聞附録』1922年10月23日、2面。
- 「海外出版消息」『舞台評論』18号、1922年10月、39頁。
- 「新舞踊公演 松竹楽劇部女生及び管絃團出演」『大阪朝日新聞』1923年1月26日、7面。
- 「松竹楽劇部女生及び管絃團[第一回公演]新舞踊音楽番組」『大阪朝日新聞』1923年1月27日夕刊、2面。
- 「爪先から血が滴るまで稽古を励む楽劇部女生」『大阪朝日新聞』1923年2月1日、7面。
- 「美しい夢幻の世界に魅惑された五千の観衆」『大阪朝日新聞』1923年2月3日、7面。
- 「前日に優る大盛況 松竹楽劇(第二日)」『大阪朝日新聞』1923年2月4日、11面。
- 「デニショウン大舞踊団一行来演—一行二十名美しき舞姫出演—」『帝劇』34号、1925年9月、9-13頁。

- 「宝塚少女歌劇の渡米延期さる」『大阪朝日新聞』1928年7月4日、9面。
- 「パリで踊る榎茂都氏：「還城楽」と「変化雛」」『大阪朝日新聞』1930年12月5日、11面。
- 「新舞踊と新舞人」『大阪朝日新聞』1930年12月7日、11面。
- 「ミチオ・イトウ」『会館芸術』（ミチオ・イトウ號）1巻5月号、1931年5月、6-7頁。
- 「(舞踊座談会) 石井漠・小林宗作・白井鐵造・大森正男・江川幸一・飛鳥明子他」『会館芸術』第5輯、1932年2月、6-14頁。
- 「西班牙の饗宴—テレジナ・ボロナアトのこと— グラフ・プログラム」『会館芸術』第5輯、1932年2月、18-24頁。
- 「革新時代に入った日本の舞踊：秋のシーズンを迎へて忙しく新運動しきり！」『東京日日新聞』、1933年9月18日、7面。
- 「非常時日本の民謡として『国民歌』の踊り」『東京日日新聞』1933年9月16日、14面。
- 「踊る・踊る・秋の舞踊界：近年にない活況」『都新聞』1933年10月15日、9面。
- 「クルト・イヨス舞踊団来朝」『舞踊新潮』2巻7号、1936年8月、23頁。
- 「舞踊・レヴユウ関係人名簿」『舞踊新潮』3巻1号、1937年1月、28-46頁。
- 「清らかに匂ふ近代的な舞踊家：ペーチ嬢が来た」『大阪朝日新聞』1938年10月23日、9面。
- 「(座談会) 観世武雄・伊藤道郎・石井漠・市川八百蔵・江口隆哉ほか、舞踊の東西を語る」『会館芸術』9巻6号、1940年6月、33-42頁。
- 「国民文化連盟について」『舞踊芸術』6巻9号、1940年9月、16-17頁。
- 「紫綬褒章の榎茂都陸平氏と江口隆哉氏」『現代舞踊』14巻11号、1966年11月、34頁。

IV 辞典・事典

- 河竹繁俊(編)『芸能辞典』東京堂出版、(第7版)1955年。
- 倉田喜弘・藤波隆之(編)『日本芸能人名事典』三省堂、1995年。
- 郡司正勝(編)『日本舞踊辞典』東京堂出版、1977年。
- 早稲田大学演劇博物館編『演劇百科大事典』平凡社、1960年。

V カタログ

- 上野松坂屋『世界舞踊展覧会・記念写真帖』上野松坂屋、1933年。
- 東京都美術館・山口県立美術館・兵庫県立近代美術館・朝日新聞社(編)『1920年代・日本展』朝日新聞社、1988年。
- 栃木県立美術館『ダンス！ 20世紀初頭の美術と舞踊』栃木県立美術館、2003年。

村山知義研究会『すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙』読売新聞社・美術館連絡協議会、2012年。

VI 年史・資料集

朝日新聞社史編修室『朝日會館史（大阪朝日編年史別巻）』朝日新聞社、1976年。

江口司（編）『日本現代舞踊資料 I』社団法人現代舞踊協会、1972年。

加藤長江（編）『音楽舞踊年鑑』（昭和6年度版）1930年。

国立劇場調査資料課『舞の会－京阪の座敷舞－（国立劇場上演資料集〈別冊〉国立劇場開場四十周年）日本芸術文化振興会、2006年。

松竹株式会社（編）『松竹八十年史』松竹株式会社、1975年。

宝塚少女歌劇団『宝塚少女歌劇廿年史』1933年。

宝塚歌劇団『宝塚歌劇五十年史』宝塚歌劇団、1964年。

――― 『宝塚歌劇五十年史 別冊』宝塚歌劇団、1964年。

――― 『宝塚歌劇の70年』宝塚歌劇団、1984年。

永山武臣（編）『松竹百年史』松竹株式会社、1996年。

日本楽壇史年表委員会『日本楽壇史年表 一九一八年一九四五年：音楽ジャーナリズムの歴史』日本洋楽資料収集連絡協議会、1977年。

日本洋舞史研究会『日本洋舞史年表 I』日本芸術振興会、2003年。

村松静光（編）『舞踊年鑑（昭和十年度版）』東京音楽新聞社、1934年。

村松静光（編）『舞踊年鑑（昭和十五年版）』舞踊ペン倶楽部、1940年。

VII 映像資料

レニ・リーフェンシュタール（監督）『民族の祭典（OLYMPIA PART I）』（1938）、DVD
「Classic Film Collection 淀川長治総監修『世界クラシック名画100選集』アイ・ヴィー・シー

レニ・リーフェンシュタール（監督）『美の祭典（OLYMPIA PART II）』（1938）、DVD
「Classic Film Collection 淀川長治総監修『世界クラシック名画100選集』アイ・ヴィー・シー

Prager, Wilhelm. *Wege zu Kraft und Schönheit*. Kulturfilm, 1925.

VIII 『宝塚少女歌劇脚本集』（1917～1942） ※1941から時により『宝塚歌劇』

「屋島物語」『第7脚本集』1917年10月、50-61頁。

「羅浮仙」『第9脚本集』1918年3月、24-38頁。

「七夕踊」『第10脚本集』1918年7月、22-34頁。

「鼎法師」『第11脚本集』1918年10月、25-41頁。

「文殊と獅子」『第 13 脚本集』1919 年 3 月、61-70 頁。
「涅槃猫」『第 15 脚本集』1919 年 10 月、43-55 頁。
「酒の行兼」『第 17 脚本集』1920 年 3 月、61-83 頁。
「雀のお宿」『第 20 脚本集』1921 年 1 月、2-11 頁。
「春から秋へ」『第 21 脚本集』1921 年 3 月、2-4 頁。
「田楽男」『第 22 脚本集』1921 年 7 月、31-41 頁。
「杓子ぬけ」『第 23 脚本集』1921 年 9 月、64-75 頁。
「火とり虫」『第 42 脚本集』1924 年 3 月、32-33 頁。
「諧謔」『第 44 脚本集』1924 年 4 月、28 頁。
「漣」『第 45 脚本集』1924 年 7 月、23 頁。
「カチカチ山」『第 46 脚本集』1924 年 7 月、4-16 頁。
「鼎法師」『第 48 脚本集』1924 年 11 月、38-50 頁。
「筆合戦」『第 51 脚本集』1925 年 3 月、4-10 頁。
「小さき謀反」『第 56 脚本集』1925 年 8 月、46-48 頁。
「へのへのも平」『第 63 脚本集』1926 年 3 月、28-30 頁。
「真夏の夜の夢」『第 69 脚本集』1926 年 9 月、43-57 頁。
「喧嘩は止めろ」『第 70 脚本集』1926 年 10 月、27-29 頁。
「かなな屑」『第 71 脚本集』1926 年 11 月、29 頁。
「慈光」『第 75 脚本集』1927 年 3 月、18-19 頁。
「富士太鼓」『第 77 脚本集』1927 年 5 月、26-31 頁。
「経政」『第 78 脚本集』1927 年 6 月、26-27 頁。
「ドナウの流」『第 80 脚本集』1927 年 8 月、17 頁。
「酒の行兼」『第 81 脚本集』1927 年 9 月、12-21 頁。
「アルルの女」『第 83 脚本集』1927 年 11 月、10-11 頁。
「夜討」『第 84 脚本集』1927 年 12 月、12-13 頁。
「幻想の日本」『第 87 脚本集』1928 年 3 月、11 頁。
「春のおどり」『第 88 脚本集』1928 年 4 月、30-31 頁。
「舞踊小品三種」『第 92 脚本集』1928 年 8 月、17 頁。
「連獅子」『第 95 脚本集』1928 年 11 月、10-12 頁。
「壽式三番」『第 97 脚本集』1929 年 1 月、19-21 頁。
「羅浮仙」『第 99 脚本集』1929 年 3 月、18-24 頁。
「春のをどり」『第 100 脚本集』1929 年 4 月、31-38 頁。
「ドナウの漣」『第 102 脚本集』1929 年 6 月、18 頁。
「牧神の午後」『第 105 脚本集』1929 年 9 月、13 頁。
「光」『第 107 脚本集』1929 年 11 月、10-15 頁。
「落葉」『第 108 脚本集』1929 年 12 月、24 頁。

- 「勸進帳」『第 109 脚本集』1930 年 1 月、17-22 頁。
「瓜盗人」『第 112 脚本集』1930 年 4 月、15-18 頁。
「鎌腹」『第 116 脚本集』1930 年 8 月、18-24 頁。
「裸山の一夜」『第 122 脚本集』1931 年 2 月、18 頁。
「浮かむ瀬の盃」『第 169 脚本集』1935 年 1 月、23-26 頁。
「薔薇の精」『第 170 脚本集』1935 年 2 月、25 頁。
「起居舞」『第 171 脚本集』1935 年 3 月、10-19 頁。
「裸山の一夜」『第 182 脚本集』1936 年 2 月、※頁記載なし。
「今様羽衣」『第 187 脚本集』1936 年 7 月、22-25 頁。
「日本の女性」『第 210 脚本集』1938 年 6 月、49 頁。
「木賊刈」『第 211 脚本集』1938 年 7 月、42-49 頁。
「夜討」『第 215 脚本集』1938 年 11 月、36-37 頁。
「総力」『宝塚歌劇脚本集』1943 年 3 月、44-45 頁。

論文題目 榎茂都陸平の「新舞踊」の研究
—鷺谷家所蔵舞踊譜の解読による再検討—

氏名 桑原和美

要旨

本論文は、大正期から昭和初期にかけて、宝塚少女歌劇団(以下、宝塚)・松竹楽劇部(以下、松竹)・榎茂都舞踊研究所を主な場として、振付家・演出家・舞踊教師として活躍し、近代的な新しい形式の舞踊を追求してその振付と上演に熱心に取り組んだ舞踊家・榎茂都陸平(1897-1986)の「新舞踊」について、鷺谷家所蔵の未公開資料(「榎茂都資料」)を用いることにより、彼の「新舞踊」の活動と作品を詳細に明らかにし、その全体像を再検討したものである。特に、舞踊譜の解読とそれによる再現演舞に基づき、具体的な作品に関して、舞踊動作や移動の軌跡、動作と音楽の関係、群舞構成といった振付の細部に立ち入り、これまで知ることができなかった彼の「新舞踊」の実像とその特徴を明らかにしたところに本論文の意義がある。

近代日本における舞踊の改革を理解する上で、「新舞踊」が概念としても、また実態としても重要な意味を持っていることに疑問の余地はない。しかし、概念については一般的な辞典類や参考文献ではほぼ一定した説明がなされているにも関わらず、研究者や評論家による議論ではそれぞれの認識の違いが示され、統一的な概念が存在するわけではないことが明らかになっている。そこで「序章」では、「新舞踊」が登場した大正期、隆盛した昭和初期、そして昭和戦前期から戦後期以降において、その言葉の意味や実態が変化してきたこと、特に戦時下での国策としての舞踊統制が現在の「新舞踊」の一般的な認識に大きく影響して

いることを指摘した。さらにこの章では、先行研究や参考文献において榎茂都陸平（以下、榎茂都）の「新舞踊」がどのように認識されているかを確認したのち、本論文全体の構成と「榎茂都資料」について説明した。

第1部「榎茂都陸平の『新舞踊』の背景」は2つの章から成る。

第1章「榎茂都流の伝承と革新」では、上方舞榎茂都流に創流時から引き継がれる改革の精神、舞や振付の心得、榎茂都流独自の舞踊譜（型附）の特徴と伝承方法、また二世扇性の「浪花踊」の振付における革新的実践、さらに日本の近代舞踊改革の祖とも位置付けられる坪内逍遙の舞踊改革論や彼が脚本を書いた《和歌の浦》の上演における榎茂都と二世扇性の協同振付の内容等、榎茂都の「新舞踊」に直接的・間接的に影響を与えたと考えられる要因について論じた。

第2章「明治期から昭和初期における西洋舞踊受容」では、明治政府の欧化政策を背景に、西洋の文化が積極的に受容され、人々の考え方や生活が大きく変化する中で、西洋舞踊が日本にどのようにしてもたらされ浸透していったのかを、政治的社交、学校教育、音楽教育の観点から考察した。さらに、西欧で舞踊を直接見た人々の発言、舞踊家の来日公演、雑誌に見られる西洋舞踊への関心等、当時の日本における西洋舞踊受容の具体的な様相を明らかにした。

第2部「榎茂都陸平による『新舞踊』の活動」では、大正期から昭和初期における榎茂都の「新舞踊」活動を4期に分け、各期の上演活動、作品内容、舞踊観について考察した。

まず**第3章「初期宝塚少女歌劇における榎茂都の新舞踊（1917 - 1921）」**では、榎茂都が宝塚に舞踊教師として入団した1917年7月から松竹に移る1921年10月頃までを対象に、新舞踊家として一步を踏み出した時期の作品や発言内容を検討し、《春から秋へ》とその後の「新舞踊」活動に結びつく舞踊改革への意思と具体的な実践について考察した。

次に**第4章「松竹楽劇部における榎茂都の新舞踊（1921 - 1924）」**では、榎茂都が松竹設立準備期間から設立後約1年の間に取り組んだ活動の内容、舞踊手の教育や振付・上演作品について明らかにするとともに、宝塚から松竹へ移籍した原因と彼の「新舞踊観」との関連に言及した。

第5章「榎茂都舞踊協会と第二期宝塚少女歌劇の時代（1924 - 1931）」では、松竹を辞めて再び宝塚に復帰した1924年から欧米舞踊視察に出掛ける1931年2月までの、榎茂都による「新舞踊」の活動内容とその特徴について述べた。この間、特に彼の私的研究機関として設立された「榎茂都舞踊協会」及び「榎茂都舞踊研究所」の活動についてはこれまで実態がほとんど分かっていなかった。そこで本論文では、「榎茂都資料」にある同協会発行の機関誌の記事や写真に基づいてその具体的な内容を明らかにした。またこれと平行する、榎茂

都にとっては第二期に当たる宝塚での「新舞踊」作品やこの時期の舞踊観についても論じた。

そして第6章「欧米舞踊視察（1931 - 1934）」では、3年余に及んだ視察の背景と目的、また視察期間中に観た様々な舞踊や、舞踊家・体操家との会談、日本舞踊の紹介、舞踊家達との交流といった幅広い活動について考察した。特に、古典的な技法に基づく日本舞踊と現地の舞踊団に振付した新舞踊《ソナタ・アパシヨナータ》の両方を上演したウィーンでの「JAPANISCHER TANZABEND（日本舞踊の夕べ）」と、レクチャー（解説）とデモンストレーション（演舞）を組み合わせた独自の形式による日本舞踊の紹介が、西欧における日本の文化・芸術に対する新たな認識につながる国際的な文化事業として大きな意義を持つものであったことを指摘した。

第3部「榎茂都陸平の『新舞踊』作品」は、第7章「大正期の新舞踊《春から秋へ》」、第8章「昭和初期の新舞踊《ソナタ・アパシヨナータ》」、第9章「大規模化する新舞踊」の3つの章から成る。各章では、榎茂都が記した舞踊譜を翻刻・解説し、さらに一部の作品については、振付を再現することにより、上演当時の観賞記や批評といった文字資料からは知ることのできない作品の詳細を明らかにするとともに、それぞれの舞踊の特徴を考察した。

第7章「大正期の新舞踊《春から秋へ》」では、舞踊譜の解説に基づく分析から、使用された動作の特徴、動作と音楽の関係、群舞構成等について考察した。その結果、《春から秋へ》では日本舞踊の動作用語が多く用いられている一方、西洋舞踊（バレエ）の技法的な用語は使われていないにも関わらず記譜の絵図や再現演舞映像からは明らかにバレエを参考にしたと推察される動作やポーズが見られること、加えて舞楽風の動作を振付に取り入れようとしたことなど、具体的な舞踊動作が明らかになった。また原田潤作曲の音楽と舞踊との関係、特に群舞における音楽の捉え方の特徴についても理解することができた。こうしたいくつかの先進的な試みが一つの作品上に示されることにより、《春から秋へ》はそれまでにはない新たな舞踊形式の先駆として大きく注目されたのである。

第8章「昭和初期の新舞踊《ソナタ・アパシヨナータ》」では、1931年1月の宝塚の愛読者大会で試演し、同年10月に舞踊視察先のウィーンにおいて現地の舞踊団に振付・上演した《ソナタ・アパシヨナータ》について、舞踊譜を解説し、それに基づく再現演舞を行うことによって、舞踊動作、音楽と舞踊の関係、群舞の構成を中心に作品の詳細と振付の特徴を具体的に明らかにした。同作品の舞踊譜は、榎茂都流の記譜法を基本に、縦書きの時間軸に沿ってその横に舞踊動作や群の構成等が言葉、絵図、記号によって記されたものだが、楽譜の練習番号・小節番号・音楽記号が多く記載され、また舞踊の動作や群舞、特にグループ編成と位置の移動の複雑な構成に関する記述が《春から秋へ》や他の舞踊に較べて非常に詳

細である。またテーマに関しては、特に第1楽章で繰り返される舞踊動作から、何か彼方にあるものを追い求める気持ちと、失意・寂しさ・諦め・悲しみ・不安といった対照的な感情が想起され、さらにこれらが交互に組み合わせられていることから、この作品が異なる二つの感情の起伏や変化を表現していたことを指摘した。動作と音楽との関係については、音楽の提示部が再現される箇所では、舞踊も提示部で行われた動作が基本的には再現されているが、ただし単純な繰り返しではなく、身体の左右や舞台上の位置及び方向の反転、さらに舞踊手の配置が連続して入れ替わる複雑な構成であることがわかった。さらに群舞についても、グループの人数、メンバー構成、位置、方向、隊形が常に連続して変化することが明らかになった。そして、こうした振付の実態と当時の彼の舞踊観とを照らし合わせると、まず音楽を聴くことで掴んだ「気分」を基にテーマを決め、さらに音楽の構造をよく理解したうえで、複雑で変化に富んだ構成とダルクローズやボーデといった律動運動の動作を積極的に取り入れることによって新しい舞踊形式を創り出そうとしていたことが推察できる。

第9章「大規模化する新舞踊」では、1931年、1936年、1951年に上演された榎茂都の代表的な群舞作品《裸山の一夜》について、舞踊譜に基づき、大人数による群舞の隊形変化を中心にした振付の特徴を考察した。加えて、戦前期に連続して創作された《出埃及記》《タンホイザーの幻想》《蟻》《総力》といった大群舞を取り入れた作品の舞踊譜を読み解くことにより、この時期の振付においては、舞踊手一人ひとりの多様な身体の動きよりも、集団性とそれが生み出すパワー、統制のとれた演舞や統一的な構成美を示すことに重点が置かれていたこと、またそこには時代と社会の求める価値観が反映されていたことを指摘した。

そして「結び」において、各章で明らかにした榎茂都陸平の「新舞踊」の多様な活動と、舞踊譜に基づいて明らかになった新舞踊作品の特徴をまとめ、彼の「新舞踊」の全体像を改めて理解するとともに、本論文の成果を踏まえた今後の課題について述べた。